〈秀しげ子〉のために Ⅱ

――〈噂〉の女の足跡――

中田睦美

承前

本稿は、前稿[1]にひき続き、秀しげ子が大正期文壇に接近し、芥川龍之介と出会った大正八年以後の彼女の後半生、特に歌人としての足跡を中心に述べるものである。ただし、芥川没後の彼女の消息についてはまだ充分に調査が及んでおらず、主として芥川の自殺前後までの時期を対象としている。

第四章　芥川龍之介との邂逅

大正八（一九一九）年（29歳）

四月、太田水穂の選によって、「祈」六首がともね子で載せられている《『潮音』「潮音社選集」5巻4号）。「祈」五首目に《御柩を送りかへれば》という表現がみられるが、これはしげ子の近親（肉親）である可能性は低い。たとえば芥川との出会い（六月）以後の作「深霧」（『潮音』7巻9号）の一首《ははそばの母の情けに云ふまじき秘言さへも明しぬるかな》には母が登場する。頻繁に〈愁い〉をも詠んだこの時期の《秘言》が、芥川との関係を指すか否かは微妙だが、《秘言》を打ち明ける相手となる母は彼女の実母であろう（実父は前年四月以前に死亡）。《御柩》の主が秀夫婦にゆかりの近親とするなら、文逸側の人物だった可能性が高い。同月、潮音社社友の宮澤雨絃選者によって、前月（三月）号に発表したらしい秀しげ子の歌一首が選ばれている《『潮音』「潮音前月抄」5巻4号）[2]。

五月、「朝雀」八首を秀しげ子で発表（『潮音』「一人八詠」5巻5号）。同月七日頃、大森海岸停留場傍四二の須山に《轉地》静養し[3]、二十一日頃には逗子葉山にある《堀内高井》方にしばらく滞在している[4]。

六月十日、「十日會」例会の席上で芥川龍之介（当時27歳）と出会う。当日はじめて「十日會」に出席した龍之介は、その席上で古くからの「十日會」会員であった秀しげ子を見かけ、そこで

彼女の紹介を、これも以前から「十日會」の参加者であった広津和郎に願い出て、二人は挨拶を交わしたらしい。そして、この会の翌日（十一日）には、しげ子のもとに芥川から書簡と創作集が送られている。彼らの出会いは「文壇風聞記　芥川氏の社交振り」（A）として、当時の文壇ゴシップに取り上げられ、注目を浴びた。しげ子の紹介を芥川にせがまれたという経緯は、広津和郎が短篇「彼女」に具体的な光景として描いている。同月、社友の齊賀琴子の選によって、前月掲載の「朝雀」より一首が取り上げられている（『潮音』「潮音前月抄」5巻6号）。

六月二十七日の「よみうり抄」によると、しげ子の消息として《両三日前帰京》とあり、六月二十三・四日あたりの帰京を伝えているが、旅先や出発時期は不明である。同月十日の「十日會」に出席していることなどから、五月後半の逗子葉山の滞在からいちど帰京し、「十日會」へ出席、その後さらにどこかへ赴いたのであろう。引き続き同記事は、しげ子の八月の避暑地先が信州であると伝えている。

七月、「夕雲」八首を秀しげ子で発表（『潮音』「一人八詠」5巻6号）。同月十三日（日曜日）午前十時より北多摩郡滝野川村田端二八三番地（太田青丘『太田水穂と潮音の流れ』昭54・8、短歌新聞社）の潮音社新居で開かれた潮音社創立満四周年記念短歌会に出席する。出席総数は二十三名で、会費は四拾銭、兼題「夏草」を各自披講している。当日の即題は「光」と「瓦」であった（『潮音』5巻8号）。

八月、「宵闇」八首を秀しげ子で発表（『潮音』「一人八詠」5巻8号）。また、先月の「潮音社記念短歌會」の報告がなされ、出席者に課されていた兼題「夏草」は競詠のため入選していないが、即題の「光」でしげ子の歌が掲載されている（『潮音』5巻8号）。同月、避暑のために信州へ赴く（六月の項参照）。

九月十日、「十日會」で芥川と再会する。「我鬼窟日録」によると、しげ子のことを芥川は《愁人》と呼んでいる。同月十五日にも、二人は個人的に出会っており、その約束はこのときの「十日會」の席上でかわされたものかもしれない。また、同月二十五日にも、二人は逢瀬を交わしている（「我鬼窟日録」）。同月、「深む思」八首を秀しげ子で発表（『潮音』5巻9号）。

十月六日、岩野泡鳴主催の《月見會》へ出席（A）、泡鳴の日記によると、当日は《雲》天であった。同月二十日前頃、しげ子は芥川宛に書簡を送っているらしい。このことは芥川から佐佐木茂索に宛てた同月二十一日付書簡の文面《丁度この手紙を出して一日位すると君（佐佐木―筆者註）の書いた封筒の手紙が届く筈だから返事をするのは見合わせてくれ》とあることから推測される。文面によると、芥川は佐佐木の来信を装った封書によって、しげ子と書簡のやりとりをしていたことになる。同じく二十八日付の佐佐木宛芥川書簡に《この頃君の手紙が一週に二三通来る》とあり、この前後、しげ子は盛んに芥川宛書簡を送付したらしい。同月、「山の湯」八首を発表（『潮音』「一人八詠」5巻10号）。

十一月十八日付の佐佐木宛芥川書簡によれば、《今日茂索二世

より来書その返事のやうな顔をして君に手紙を書》いたとあり、同月十五日前後にも、しげ子は芥川に手紙を送ったと思われる。このやりとりは、同月二十五日、芥川がしげ子の自宅に《夜おそくまで（中略）すはりこみ》、しげ子から《意氣な紙入れまで貰つて歸つた》という（岡栄一郎「芥川の短冊」『文芸春秋』昭26・3、A）訪問をめぐるものかもしれない。六月に続き、この月の「文壇風聞記」にも二人についての言及がある。[6] この時期の佐佐木茂索と芥川との交流が、しげ子と芥川との関係をよく映し出すひとつの手がかりとも考えられる。同月、「木の葉の音」五首が秀しげ子で、太田水穂の選によって選ばれている（『潮音』「潮音社選集（其三）」5巻11号）。

十二月、「冬近し」七首が秀しげ子で掲載（『潮音』「潮音社選集」5巻12号）。

第五章　鞆音からしげ子へ

大正九（一九二〇）年（30歳）

二月、「沼の夕」八首を秀しげ子で発表（『潮音』6巻2号）。

三月、「伊豆山荘」七首が秀鞆音で掲載される（『潮音』「潮音社選集」6巻3号）。

なお、これ以降は特に断らないかぎり、歌の署名はすべて「秀しげ子」である。彼女は、秀鞆音子・秀鞆音・鞆音・ともね子といった雅号を概ね大正八年四月までしか使用しておらず、以降は、もっぱら秀しげ子という本名を用いている。ただし、同月の「伊豆山荘」のみ秀鞆音を使用している。この時期、彼女に心境の変化をもたらす何らかの事件があったのか、また、鞆音という雅号がしだいにしげ子の心境には合わなくなってきたのか、その理由はまだ不明である。[7] 芥川と出会う二カ前よりもっぱら本名を使用し始めることから芥川との出会いが原因になった可能性は少ないであろう。むしろ、しげ子自身の内面に即して、鞆音という雅号からイメージされるどこか中性的な仮面を脱ぎ捨て、一個の人間として、あるいは一女性としての内実を率直に歌うという意志の表明であると受け取りたい。

四月、「春の雪」八首を発表（『潮音』「一人八詠」6巻4号）。同月十日午後二時から、しげ子を含む六名（泡鳴、翠子、英子、しげ子、駒子、落葉）が、森ヶ崎鐵泉旅館大金での「十日會」春季大会に参加したが、しげ子はその世話人として出席している。[8] 同月十九日、馬場孤蝶・若山牧水らが発起人となり、福永挽歌の短篇集出版を記念する「『夜の海』の會」と称する会が永楽倶楽部にて午後五時より開かれ、しげ子も出席している。[9] この「『夜の海』の會」の全体写真と秀しげ子の名前が同月二十五日付けの読売新聞第七面の上段に掲載されている。

五月、潮音社の唐木田李村による「品評録（一〇）」に前月の「一人八詠」に対する批評があり、そこでしげ子の「春の雪」の一首について《女性固有の歌ひ振りで頗る感傷的で（中略）内的観照が足りない》と酷評されている（『潮音』6巻5号）

六月、「眞間の堀割」八首を発表（『潮音』「一人八詠」6巻6号）。同月九日、「故岩野泡鳴氏追悼會」が、《徳田秋聲・田山花袋（中略）菊池寛》らを発起人とし、雑司谷の開泉閣で午後五時から開かれている。[10] 四、五十人が集い、しげ子も列席している。食事の途中に、記念帳へ寄せ書きをしたらしいが、現物は未確認である。駅までの帰路を三嶋章道とともにする。[11] 以後、毎月九日泡鳴忌日に巣鴨一〇八二の故人宅で「泡鳴會」が行われているが、[12] 毎月の泡鳴忌にしげ子が列席していたのかどうかは不明である。

八月、「籠り居」八首を発表（『潮音』「一人八詠」6巻8号）。同号に潮音社の橘友孝による「品評録（一四）」が前月号に触れた「特選及び八詠」として載り、そこでしげ子の作品「眞間の堀割」の一首を取り上げ、叙景と心情とが得難い境地で詠われ、敬意を表したいと評価している（『潮音』6巻8号）。

九月、「息安く」八首を発表（『潮音』「一人八詠」6巻9号）。

十月、雑誌『新潮』に批評「根本に觸れた描寫」を寄せ、有島武郎の「或る女」や芥川龍之介の「秋」を論評、これらと比べてトルストイ・ドストエフスキー・ゲーテ・イプセンらの描く女性たちの個性は《歴然として讀後の心を領さずにはをりません》と述べ、花袋や龍之介らの作品には女性の本質が丁寧に描かれていないと批判している。同月九日、慶応義塾大学・三田ホールで、間宮茂輔らの同人雑誌『ネスト』主催の文芸講演会が開かれ、講師として呼ばれた芥川は「文藝雑觀」と題する講演を行う。講演後、主催者側が《三田通のカフエ》に講師や知名の来賓を招待したが、その席上に秀しげ子も居た。大橋房子（佐佐木茂索の妻―筆者注）と共に芥川の傍らに座っていたらしい。[13]（A）。同月、「残るあつさ」八首を発表（『潮音』6巻10号）。

十一月、「秋思」五首が選ばれている（『潮音』「潮音社選集」6巻11号）。

大正十（一九二一）年（31歳）

一月、二男一彦を出産する（A・B・C・F）。二男・一彦は、早稲田大学商学部を卒業し、東京急行電鉄会社に勤務したと伝えられる。[14]

二月、「籠り宿」八首を発表（『潮音』7巻2号）。[15]

四月、「春浅く」八首を発表（『潮音』7巻4号）。

五月、「落ち居ぬ心」三首が掲載される（『潮音』「潮音社選集」7巻5号）。同月十五日『現代婦人詩歌選集』が婦女會社より刊行される。同書中の正富汪洋執筆による「明治大正婦人詩歌小史」の中で、秀しげ子の出身地と歌三首が確認される。本書において、彼女が春草会の会員であり、また、どの派にも属さない歌人のひとりであることも紹介されている。[16] ただし、この時期、依然として彼女の短歌は『潮音』に掲載されており、この点も改めて考察したい。

六月、「をりをり」五首掲載（『潮音』「潮音社選集」7巻6号）。

七月、「雨」八首を発表（『潮音』「一人八詠」7巻6号）。

八月二日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）の「春草

會詠草」七月例会の項に一首掲載されている。席題は無題であった。同月七日の日曜日、十日会の会員らと共に大磯にある三島章道の別荘へ赴き、大磯海岸で海水浴を楽しんでいる。この催しが「十日會々員の大磯行」として同月十四日の読売新聞に掲載され、当該記事の副題に「どんとつく波」と記され、大磯海岸の浜辺に坐る水着姿の十日会会員らの写真と、おそらく三島章道の別荘と思われる場所での会員らの写真二点があり、そこに秀しげ子の名前も見られるが[17]、当人の姿は確認できない。

九月、「深霧」八首を発表（『潮音』7巻9号）。

十月、「秋」五首が載せられる（『潮音』「潮音社選集」7巻10号）。同月五日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草　北川浅二夫人追悼会」の項に一首掲載。同月十日、潮音社の東京地区での催しとして、「潮音社十日會（十月例會）」が田端の潮音社で午後六時より開かれ、しげ子も出席している。潮音社例会の出席者は十九名であり、十月号の歌について互いに評し合い、また現代歌壇が《外界》から受ける感覚や感動にのみ終始する傾向を批判し、《實感に就て》注意すべき問答が交わされ、その例は西行や実朝や芭蕉にもおよんだとされる。散会は午後十一時である（『潮音』7巻12号）。

十一月、「那須野」八首を発表（『潮音』7巻11号）。同月十八日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」に兼題「瞳」で一首掲載される。

十二月、「行樂」六首が掲載される（『潮音』「潮音選集」7巻12号）。同号の「感想と雑録」に、福原廣という潮音社同人の投書が寄せられている。福原は《潮音の社友の人々》で印象の深い人々が十数人いると述べ、そのなかで《安達不死鳥・秀しげ子・松澤いそえ、中村霞水・野村鳴淑・福井忠雄》らの名を挙げ、彼ら社友が《妙に私の頭を占領してゐます》と記す。さらに、印象的な作として、前月号所載のしげ子の「那須野」中から一首《うらぶれの心かなしも逢ひがたきむなしさをなほたのみけるかも》をあげている（『潮音』「潮音選集」）。同月六日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」に兼題「旅」で一首掲載されている。

大正十一（一九二二）（32歳）

一月一日の『讀賣新聞』第四面に、しげ子の「早春」と題する十首が単独で掲載されている。同月十日、しげ子と土方奥志が幹事となって、夕刻から神田の中華料理店第一樓で十日会の一月例会を催している[18]。同月二〇日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」の項に兼題「新年雑詠」で一首掲載されている。しげ子は一月一日の『讀賣新聞』に掲載された十首のうち一首を再び詠んでいる。

二月、無題で六首が掲載される（『潮音』「潮音詠草」8巻2号）。同月二十六日午後一時から清水谷公園の皆香園で開催された春草会の五十回記念会に出席している。出席者は十五名で、そのうち女性は六名であった。翌日の『讀賣新聞』に「春草會記念會」と

記された女性六名のみの大写しの写真とキャプションが付され、しげ子の姿も鮮明に写っている。[19]

三月一日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」の項に即題「水」で一首掲載。掲載日から推すと、前月二十六日に催された春草会の五十回記念会をさすとも考えられ、まぎらわしい。ただし、詠草のサブキャプションには「五十回記念會」の記述はなく、即題も「水」であり、しげ子の掲載歌も二十六日に詠まれたものと異なるので、定例の三月例会における詠草とみてよいだろう。

四月、「特選」という項目で「春寒」八首が掲載される（『潮音』「感想と雑録」8巻4号）。同月二四日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」四月例会の項に即題「色」で一首掲載。

五月、無題で八首が掲載される（『潮音』「潮音詠草」8巻5号）。同月二十五日午後五時から神田萬世橋の西洋料理店ミカドで、春草会が「歌集『黄水仙』の會」として会員の秋元松子の歌集出版記念会を催し、しげ子も出席している。[20] 同月三一日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草（下）」「黄水仙の會」の項に兼題「黄」で一首掲載。

八月十八日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」八月例会の項に即題「手」で一首掲載。

十月十日、秀しげ子と長谷川零餘子が十日会の幹事となって、午後六時からミカドで十月例会を催している。[21] 同月二八日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」十月例会の項に即題「病」で一首掲載。

十二月二六日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」納会の項に即題「林檎」で一首掲載。

この年、しげ子は小唄を井上光子に師事し、二年後（大正十三年）には名取となって「井上光代」を名乗り、小唄教授の看板を掲げることになる。また、時期は特定できないが、茶道の裏千家や邦舞の坂東流についても師範の免許を取得したらしい。[22] たとえば、『潮音』二月号に載せられた歌のなかに《ひとすじに踊りつかれて》と詠む歌があり、この年の一月ごろには舞いに打ち込む日々があり、坂東流の免許取得もこの時期だったのかもしれない。

第六章　震災前後

大正十二（一九二三）年（33歳）

一月十四日午前十時より、潮音社主催の「新年短歌會」が晩餐を含む会費八十銭で田端の潮音社にて開かれ、出席している。当日の出席者は二十六名であり、兼題は「眼前即事」とされ、個々人の雑詠が詠まれ、競詠をしている。社友らの詠んだ歌に対し、太田の批評や余興が続き、散会は午後十時になった（『潮音』9巻2号）。同月一八日、「よみうり文藝」（『讀賣新聞』第7面）「春草會詠草新年發會」の項に即題「一」で一首掲載。

二月、潮音社の「新年短歌會詠草」に秀しげ子の歌も掲載され

ている（『潮音』9巻2号）。同月一三日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」二月例会に「無」で一首掲載。

三月十三日前後、京都に旅行している。[23] 同月二七日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」三月例会に席題「中」で一首掲載。

四月二十四日頃、秀家は、現・東京都新宿区の《大久保百人町宅》の電話番号を《四谷一一六番》に変更。[24]「よみうり抄」に、秀しげ子個人の情報として番号変更が通知されている。この電話番号の変更とともに、自宅の住所も《大久保百人町宅》と記されていることから、大正六年五月時点での現住所《芝區櫻川町八》は、大正十二年四月頃までに東京都新宿区（大久保）百人町二ノ二二五の場所に移されたということになろう。[25] あるいは、大正十二年二月の『潮音詠草』（8巻2号）に掲載された歌に、《移り住みいまだなじまぬ此の家に》という表現がみられることから、大正十一年一月までにこの大久保町に転居したとする方が正しいのかもしれない。また、江口渙によれば、[26] 彼自身、大正九年八月に《谷中清水町一番地から上野桜木町一七番地》へ越しており、そのころ偶然にも江口の家の《眼と鼻のあいだ》に、しげ子の弟の家があったらしく、時折そこへ《大久保百人町から》弟の家へ訪れる彼女の姿を、江口渙が往来越しから見かけることがあったようである。そのため、大正九年八月には、秀家が大久保町に越していた可能性も考えられる。ただし、江口渙が彼女のことを小瀧家の《長女》と記していることや、江口自身が《何しろここに書いた事柄が、ふるいのになると三十年から、にもなるので、日時や場所の記憶にはっきりしないところや、まちがいがあった》[27] と付記していることなどから、江口家が越して間もない大正九年八月以前に秀家が大久保町に越していたかどうかは判然としない。仮に、大正九年八月以前に秀家が大久保町へ移っていたとすれば、《移り住みいまだなじまぬ此の家に》と詠まれた大正十一年一月から大正九年八月まで約一年四ヶ月の隔たりがある。

六月九日午後六時から、春草会臨時晩餐会が市内丸の内有楽町の《山水樓》で催され、出席し歌を詠んでいる。この晩餐会は春草会会員らのうち、渡欧する小野つる子の送別や上京した神尾光子の歓迎、ほかに課長に就任した高野六朗博士や歌集『不知火』を出版した宮坂みち子らの祝いなどを兼ね、臨時に催されたものであった。[28]

八月十六日頃、三浦三崎町に滞在、いったん自宅へ戻ったのち、信州へ避暑に赴いたらしい。[29]

九月一日、午前十一時五十八分、関東大震災が起きた。当日のしげ子の消息は不明だが、芥川には周知の通りその惨状の見聞や影響を記したいくつかの短文（「大震前後」「大震雑記」など）があり、のち「大正十二年九月一日の大震に際して」としてまとめられる。

十月二十八日、春草会会員の畑耕一と竹久夢二が幹事となり、正午から本郷三丁目の《燕樂軒》にて、先の関東大震災で助かった会員たちと「春草會いのち拾ひの會」を開いている。[30] この「い

のち拾ひの会」で震災に類する歌が詠まれていた可能性もあるが、震災による都市機能の打撃は壊滅的であり、詠草を紙面に載せる余裕などあろうはずもないため、後日の詠草記事はない。ただ、この会の知らせが前日の「よみうり抄」に掲載されているが、そこには春草会会員らの互いの無事を確かめ合うことを目的とした呼びかけの意味もあったのではないだろうか。とすれば、しげ子もこの会に出席していた可能性が高いが確認できていない。

十一月、潮音社は関東大震災で被災した社友らの義捐金を、九月二十二日付けで同人に呼びかけ、十二月十日まで受け付けを行うと記している（『潮音』9巻11号）。なお、東京雑誌協会の申し合わせで関東大震災による臨時措置として、『潮音』十二月号は休刊となっている（『潮音』9巻11号）。

十二月二十六日、潮音社は集った義捐金を被災した社友ら二十六名に渡している（『潮音』「被災社友への義損金収支報告」10巻1号）。

ところで、関東大震災は、帝国劇場にも多大の損失を与えた。帝劇は大正九（一九二〇）年九月に有楽座を買収するなど、当時の興行界に向け意欲的な商業的劇場経営の先陣を切っていたが、この大震災で二つの劇場を焼失させ、その改築費用や震災で奮闘した社員に出した報奨金、従業員への震災見舞金、解雇者への六ヶ月ないし二ヶ月の解職手当の支払いなど、巨額の負担を強いられた。再び劇場の経営が軌道に乗りかけた時期には金融恐慌（昭二・三）や世界恐慌（昭四・十）による不況が劇場経営にも影響し、昭和四（一九二九）年末には松竹株式会社と十年間の賃貸契約を結んだが、再び昭和恐慌（昭五）に巻き込まれ、契約期間がまだ終わらない昭和十二（一九三七）年末、東宝株式会社に買収された。こうした諸般の事情も契機となり、時期は特定できないが、秀文逸の帝劇から電工社への転職（もしくは独立）があったのではないだろうか[52]。

大正十三（一九二四）年（34歳）

一月、前年の十一月に潮音社が呼びかけた被災社友らのための義捐金収支報告が大正十二年十二月十六日付けでなされ、報告欄に義損金収入と各同人の名前が受け入れ順に記されている。義捐した社友は全部で二百六名にのぼり、一口《弐拾五銭》から受け付け、全部で《千七百二十口》になり、総額《四百三十圓》が集められた。被災社友二十六名のうち自宅を焼失した同人には《金拾八圓》が、寄宿先を焼失した同人には《拾圓》が供与され、その総額は《四百弐拾八圓》、残金《弐圓》は送費にあてられた。義捐金供出者総覧の後ろから十五番目に秀しげ子の名前も挙がっており、彼女は二十口（五円）の義捐に応じている（『潮音』「災者友への義損金収支報告」10巻1号）。

二月二十四日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」二月例会「竹内薫兵博士祝賀會」の項で一首掲載。この例会は、春草会会員である竹内薫兵が京都大学に提出していた医学論文が前年十一月中頃に認められ、医学博士を授与された祝賀

を兼ねて催されたものであった。[32]

三月十三日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」の項、即題「根」および「うごく」のうち、「根」の題詠で一首掲載。

五月十一日、「よみうり日曜附録」（『讀賣新聞』第6面）「春草會詠草」五月例会の項、即題「初木」で一首掲載。

八月三日、「よみうり日曜附録」（『讀賣新聞』第6面）「春草會詠草」即題「川（大川）」で一首掲載。同月十三日に日光の中禅寺湖に出掛けている。その後、信州へ赴き、しばらく滞在したらしい。例年のこの時期の彼女の行動から推して、おそらく避暑だと思われる。同月十七日の『讀賣新聞』に、十三日の行動とその後の予定を記した「日光にて」という短文を寄せている。[33]

前述の通り、この年しげ子は「井上光代」で小唄の名取となり、教授免許も取得しているらしいが、詳細はあきらかでない。[34]

大正十四（一九二五）年（35歳）

二月二四日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）「春草會詠草」二月例会の項、即題「電燈」で一首掲載。場所は、会員の竹内薫兵が開業する竹内病院で行われている。

三月一日、夕刻、《華やかな春の灯に八十餘人》の人々が《紅葉館》に集い、泉鏡花の全集出版記念会が開催される（A）。この祝賀会に、秀しげ子と芥川龍之介の両名が参加している。祝賀会は、鏡花全集の出版元である春陽堂が主宰し、「鏡花會記事」として、『新小説（臨時増刊）』号（大14・5、第30年第5号、春陽堂）に当日の会の模様が記されている。まず、発起人を代表し笹川臨風が挨拶、それに応える形で鏡花が答弁し、その後、鈴木三重吉の音頭で泉夫妻の祝福を祈念してシャンパンの杯が交わされ、里見弴の口上で余興が始まり、《歌澤》や《長唄》などが唄われ、参加者らに《歡びの色が溢れた（中略）まさに文壇近頃の美はしい集》まりであったと伝える。続く、当該記事には、会の《出席者芳名》として、参加者六十六名の名前を掲げている。ところで、この会は文字どおり《文壇近頃》の集まりであったようで、出席者は各方面における歴々たる人物が並んでいる。ちなみに、参加者には、折口信夫や柳田國男を始めとして、芥川周辺の同人たちや、しげ子と関係のある人々らも名を連ねている。同月二十三日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第4面）に「春草會詠草」三月例会兼「岡田道一氏結婚祝賀会」の項で即題「嫁」で一首掲載。

六月二十八日、春草会会員の北川浅二郎宅で春草会の月例会が正午より催され、この日は会員以外の久米正雄、吉井勇、里見弴らも参加し、しげ子も「雲」の席題で詠んでいる。[35]

七月二十六日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第11面）に「春草會詠草」七月例会の項で一首掲載される。席題は無題であった。

十一月十日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第7面）に「春草會詠草」の項で一首掲載される。この春草会は、会員の阿部龍

夫の上京を歓迎する会として開かれている。同月二十五日の夜、日本橋にある《カフェー興樂》で、九日に欧州から帰国した茅野蕭々雅子夫妻を迎える春草会「歸京歡迎歌會[36]」が開かれ、これにも出席している。同月三十日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第7面）に「春草會詠草」の「茅野蕭々、茅野雅子両氏歡迎歌會」項で一首掲載される。

十二月八日、夕刻より安成二郎の『子を打つ』の出版記念會」が本郷の燕樂軒で催されている。当夜の様子を伝える記事には《春草會一派の華やかな女性の多數》と記され、また春草会の男性会員も高野六郎・竹内薫兵の名前が挙げられている。大正六年三月に安成二郎の編集する『女の世界』からインタビューを受けた事実やその後の交流ぶりも考慮すると、しげ子も参加していた可能性は高いが、その名は見当たらない[37]。同月二八日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第7面）に「春草會詠草」歳暮雑感の項で一首掲載される。

第七章　晩年の芥川としげ子

大正十五（一九二六）年（36歳）

一月二十六日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第7面）に「春草會詠草」の正月雑詠の項で一首掲載される。歌会は、会員の山川柳子宅で開かれている。

二月二十一日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第7面）に「春草會詠草」二月例会の項、兼題は「顔」と「面」であり「面」の題詠で一首掲載される。

三月十八日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第7面）に「春草會詠草」三月例会の項、兼題「春風」で一首掲載。

四月六日の夜（あくまで小穴隆一の「二つの繪」を信じれば）、秀しげ子が自笑軒の帰りに芥川の自宅を訪問しているらしい。そこでしげ子は、自宅で建築中の茶室の図面を差し出し、自笑軒の茶室の間取りも説明し、茶室に掛ける茶掛けを描いてもらいたいと小穴に頼み、用件を済ませると連れてきた妹とともに帰ったらしい。しげ子が帰宅した後、芥川は小穴に掛け軸を描いてくれるように頼んでいる。同月十八日、春草会歌会が会員の秋元松子宅で開かれ出席している。同月二十二日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第11面）に「春草會詠草」四月例会の項、兼題「芽」で一首掲載される。

五月九日、午後六時から日本橋室町にある三共エムプレスで開かれた岩野泡鳴の七回忌に出席している。同月十一日の『讀賣新聞』に「岩野泡鳴氏七週忌記念會」と題された写真には彼女の姿は見当たらないが、キャプションに秀しげ子の名前が挙がっている[38]。この三共ビルディングは、三越百貨店前に位置する建物で、その七階に三共エムプレスの本店があったが、それ以外にも支店が帝国劇場の南別館の二階や、銀座の尾張町角の三共ビルにもあった[39]。この仏蘭西料理店エムプレスは、当時相当に有名なレストランだったと思われるが、『帝劇』と夫・文逸との関わりなどか

ら、しげ子がこの会場設営を提案したのではなかろうか。同月三十一日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第11面）に「春草會詠草」五月例会の項、「木」の兼題で一首掲載。東京ステーションホテルで開かれている。

六月二十五日、内幸町の東洋ビルディング中山研究所談話室にて「春草會第百回祝賀會」が午後五時より開催され、参加している。談話室で「百」という席題の歌を作り、レエンボー食堂で食卓を囲み、岡田道一・永田龍雄らによって会の思い出話しなどがなされたらしく、散会は午後十時とある。当該記事には春草会の婦人会員としてしげ子も含めた七名の写真とキャプションが見られる。[40] 同月二十八日の「よみうり婦人欄」（『讀売新聞』第11面）に「春草會詠草〔第百回例会〕」が載り、一首掲載される。当日の参加者は、茅野蕭々・竹内薫兵・高野六郎・吉井勇・竹久夢二ら二十三名であると伝えている（『讀賣新聞』第7面　大15・6・27）が、詠草には二十九名の歌が掲載されている。

七月十三日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第7面）の「春草會詠草」七月例会「夏の歌」の項に一首掲載。特に席題は指定されなかったようで、夏を現す歌を各自が随意に詠んだらしい。同月中旬、しげ子は鵠沼海岸の東屋旅館に滞在しており、東屋旅館近くにある貸家「イの四号」に家を借りていた芥川に、病気見舞いで訪ねている[41]（F）。

九月二十五日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第7面）の「春草會詠草」九月例会の項に一首掲載される。「果」と「物」が即題であったが、しげ子の歌に題詠そのものは詠み込まれていない。

十一月三日夜、六月の春草会百回例会の祝賀会が行われた中山文化研究所で、昨年十一月初旬に上京した会員の阿部龍夫の渡欧送別会が催され、出席している。[42] 同月一五日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第3面）の「春草會詠草」「阿部龍夫君送別會席上詠」の項に一首掲載される。

昭和二（一九二七）年（37歳）

一月、「現代女流百人一首」（『婦人公論』第12年第1号）に、秀しげ子の歌も一首掲載される。同月二十六日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第3面）の「春草會詠草（下）」一月例会の項、「和む心」の兼題で一首掲載される。

二月二一日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第3面）の「春草會詠草」二月例会の項、即題の「雪」で一首掲載。

三月十五日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第3面）の「春草會詠草」三月例会の項、即題「飛ぶ」で一首掲載。同月同日に、春草会の歌集として、会員三十五人の自選歌による『雑草』（大学書房）が竹久夢二の装幀により発行された。[43] この歌集は、昭和二年一月までの春草会詠草中より集められたもので、一人十八首づつを各人が精選し、選歌に相当する作品のない者は新作を詠んでいる。また、目次の人名は入会順に掲げられている。[44] 目次では、茅野雅子・茅野蕭々・水町京子・神尾光子らに続く五番目にしげ子の名が挙げられ、「穂すすき」で十八首詠み、そのうち、八首

を選歌している。

五月二十四日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第3面）の「春草會詠草」五月例会の項、「パラソル」の席題で一首掲載。

七月二十四日未明、芥川龍之介自裁、享年三十五歳。しげ子は、芥川の葬式に弔問しているらしい[43]（A）。この前後におけるしげ子の姿をやや興味本位に伝える周辺の伝聞はしばらくおく。だが、社会的反響も大きかった芥川の自殺について、しげ子自身の内面を吐露した著作は見当たらない。偶然かどうか、八月、九月、十月の読売新聞紙上には春草会の詠草も掲載されていない。

十一月十七日、「よみうり婦人欄」（『讀賣新聞』第3面）の「春草會詠草」十一月例会の項、席題「垣」で一首掲載。

昭和四（一九二九）年（39歳）

四月、二男一彦の豊島師範付属小学校の入学式に出掛けている。そこに芥川の二男多可志を連れた文も居合わせ、入学式終了後、講堂を出たところでしげ子の方から文に声を掛けたらしく、二人は言葉を交わしている[46]。

昭和二十五（一九五〇）年（50歳）

十月一日、夢二会の会長である長田幹雄（岩波書店元取締役）宅にて、「夢二会の集ひ」が催されている。春草会の会員らも参加したらしく、その時の寄せ書きには、岡田道一や納秀子（桜井八重子―筆者注）・小池孝子・酔香ら春草会会員の名前があげられている。寄せ書き現物を未確認のため、しげ子が出席しているかどうか定かではないが、しげ子にとって同時期の会員である夢二を追慕する意味合いや、岡田道一などの顔ぶれから推して、この会に出していた可能性も少なくない[47]。ただし、すでに作歌の席現場から遠ざかっていたとも考えられ、詳細は明らかではない。

昭和二十八（一九五三）年（63歳）

三月十一日、江口渙のもとに秀しげ子から書簡が送られている。手紙には、芥川と自分とのことを聞いて貰いたい趣旨が述べてあり、自宅の住所と交通機関が書き記されていたらしい。だが、江口は訪れなかったようである[48]。

昭和四十八（一九七三）年

三月、享年八十四歳で没している（C）。

十二月、春草会の発会から五十五年目を迎えたことを記念して、『五十年集』（金剛出版）が刊行されている。現会員四十七名も含め、全五十三人の自選歌が編まれた。「序」「あとがき」によると故人の会員の作品は遺族から供出されており、しげ子の歌も一七首収録されている[49]。

第八章　〈歌人〉秀しげ子の足跡

最後に秀しげ子の〈歌人〉としての足跡を簡略にまとめておく。秀しげ子の消息を求めて新聞や雑誌などの調査を試みたとこ

ろ、これまで未紹介の短歌四一四首と短文二篇を新たに発掘することができた。ここにそうした作品（歌や本文）のすべてを掲げるのは困難なので、題名と掲載誌（紙）に絞り、その作歌活動の軌跡を図表として示してみる。

【A　『ビアトリス』『女の世界』『潮音』】

題	首数	署名	発表誌（紙）巻号	刊行年（元号）月	備考
まぼろし	8	秀鞆音	ビアトリス（第一巻五号）	大正五年一一月	○
病みてある日	10	〃	〃（第二巻三号）	〃六年四月	○
白菖蒲	12	〃	女の世界（第三巻六号）	〃六年六月	
堪へがたき日に	12	〃	〃（第三巻九号）	〃六年九月	
霧の流	14	〃	潮音（三巻一一号）	〃六年一一月	○
秋の日ざし	10	秀鞆音子	〃（三巻一二号）	〃六年一二月	
（兼題）秋の夜	1	〃	〃（三巻一二号）	〃六年一二月	
冬枯るゝ頃	8	〃	〃（四巻一号）	〃七年一月	
新らしき日に	9	〃	〃（四巻二号）	〃七年二月	
鴨の聲	10	〃	〃（四巻三号）	〃七年三月	
早春の歌	9	〃	〃（四巻四号）	〃七年四月	
春の悩み	10	〃	〃（四巻五号）	〃七年五月	
一途の聲	8	鞆音	〃（四巻七号）	〃七年七月	○「一人八詠」
（兼題）「夏草」	1	〃	〃（四巻七号）	〃七年七月	○
鳥かげ	9	秀鞆音子	〃（四巻八号）	〃七年八月	
眞夏の夢	9	〃	〃（四巻九号）	〃七年九月	
秋風篇	9	〃	〃（四巻一〇号）	〃七年一〇月	
草紅葉	7	鞆音	〃（四巻一一号）	〃七年一一月	「潮音社選集」

熱に悩みて	10	秀鞆音子	〃	（四巻一二号）	〃	七年一二月	
祈（旧）	6	ともね子	〃	（五巻四号）	〃	八年四月	「潮音社選集（其三）太田水穂選」
（無題）	1	秀しげ子	〃	（五巻四号）	〃	八年四月	「潮音前月抄」（宮澤雨絃選）
朝雀	8	〃	〃	（五巻五号）	〃	八年五月	○ 「一人八詠」
（無題）	1	〃	〃	（五巻六号）	〃	八年六月	「潮音前月抄」（齊賀琴子選）
夕雲	8	〃	〃	（五巻六号）	〃	八年七月	○ 「一人八詠」
宵闇	8	〃	〃	（五巻八号）	〃	八年八月	○ 「一人八詠」
（即題）光、瓦	1	〃	〃	（五巻八号）	〃	八年八月	○
深む思	8	〃	〃	（五巻九号）	〃	八年九月	○
山の湯	8	〃	〃	（五巻一〇号）	〃	八年一〇月	○ 「一人八詠」
木の葉の音	5	〃	〃	（五巻一一号）	〃	八年一一月	○ 「潮音社選集（其三）太田水穂選」
冬近し	7	〃	〃	（五巻一二号）	〃	八年一二月	○ 「潮音社選集」
沼の夕	8	〃	〃	（六巻二号）	〃	九年二月	○
伊豆山荘	7	秀鞆音	〃	（六巻三号）	〃	九年三月	「潮音社選集」
春の雪	8	秀しげ子	〃	（六巻四号）	〃	九年四月	「一人八詠」
眞間の堀割	8	〃	〃	（六巻六号）	〃	九年六月	「一人八詠」
籠り居	8	〃	〃	（六巻八号）	〃	九年八月	「一人八詠」
息安く	8	〃	〃	（六巻九号）	〃	九年九月	「一人八詠」
残るあつさ	8	〃	〃	（六巻一〇号）	〃	九年一〇月	○
秋思	5	〃	〃	（六巻一一号）	〃	九年一一月	「潮音社選集」
籠り居	8	〃	〃	（七巻二号）	〃	一〇年二月	○ 目次では「籠居」
春浅く	8	〃	〃	（七巻四号）	〃	一〇年四月	○
落ち居ぬ心	3	〃	〃	（七巻五号）	〃	一〇年五月	「潮音社選集」

をりをり	5	〃	〃（七巻六号）	〃	一〇年六月	「潮音社選集」
雨	8	〃	〃（七巻六号）	〃	一〇年七月	「一人八詠」
深霧	8	〃	〃（七巻九号）	〃	一〇年九月	○
秋	5	〃	〃（七巻一〇号）	〃	一〇年一〇月	「潮音社選集」
那須野	8	〃	〃（七巻一一号）	〃	一〇年一一月	○
行樂	6	〃	〃（七巻一二号）	〃	一〇年一二月	「潮音選集」
（無題）	6	〃	〃（八巻二号）	〃	一一年二月	「潮音詠草」
春寒（特選）	8	〃	〃（八巻四号）	〃	一一年四月	「感想と雜録」の枠外
（無題）	8	〃	〃（八巻五号）	〃	一一年五月	○ 「潮音詠草」
雜詠	1	〃	〃（九巻二号）	〃	一二年二月	○ 「新年短歌會詠草」（會者二六名）

※備考欄の○は、森本修・浅野洋らによって、それぞれ部分的に紹介済みのものを示す。

【B 『現代婦人詩歌選集』】 3首 （大正一〇年五月 婦女會社）

【C 単独発表「早春」】 10首 『讀賣新聞』 （大正一一年一月一日・第四面

【D 『婦人公論』】 1首 （昭和二年一月第十二年一号 婦人公論社）

【E 『ざつそう』】 18首 「春草会歌集」 （昭和二年三月 大学書房）※一八首のうち、八首は詠草に既発表である。

【F 『五十年集』】 17首 「春草会五十周年記念歌集」（昭和四八年一二月 金剛出版）

【G 春草會詠草】（以下、いずれも発表紙は『讀賣新聞』・署名は「秀しげ子」・各一首である。）

題	掲載日	掲載面・欄	備考
七月例會	大正一〇年八月二日	第四面「よみうり婦人欄」	北川浅二氏夫人追悼會
鎌倉にて	〃 一〇年一〇月五日	〃 〃	
『瞳』	〃 一〇年一一月一八日	〃 〃	
「旅」	〃 一〇年一二月六日	〃 〃	
兼題『新年雜詠』	〃 一一年一月二〇日	〃 〃	

兼題『水』	〃	一一年三月一日	〃
色・四月例會即題	〃	一一年四月二四日	〃
手・八月例會即題	〃	一一年八月一八日	〃
病・十月例會即題	〃	一一年一〇月二八日	〃
納會即題『林檎』	〃	一一年一二月二六日	〃
即題『一』新年發會	〃	一二年一月一八日	第七面「よみうり文藝」
『無』二月例會	〃	一二年二月一三日	第四面「よみうり婦人欄」
席題『中』三月例會	〃	一二年三月二七日	〃
小野つる子氏送別歌	〃	一二年六月一二日	〃
竹内薫兵博士祝賀會	〃	一三年二月二四日	〃
即題『根』『うごく』	〃	一三年三月二〇日	〃
即題『初木』五月例會	〃	一三年五月一一日	第六面「よみうり日曜附録」
（無題）	〃	一三年八月三日	〃
即題『電燈』二月例會	〃	一四年二月二四日	第七面「よみうり婦人欄」
兼題『嫁』	〃	一四年三月二三日	〃
席題『雲』	〃	一四年七月三日	〃
七月例會	〃	一四年七月二六日	第一一面
阿部龍夫君上京歓迎會	〃	一四年一一月一〇日	第七面
茅野蕭々、茅野雅子	〃	一四年一一月三〇日	〃
両氏歓迎歌會			
歳暮雑感	〃	一四年一二月二八日	〃
一月例會正月雑詠	〃	一五年一月二六日	〃
二月例會兼題『顔』『面』	〃	一五年二月二一日	〃

於山水樓
二月例會

於竹内病院
三月例會兼岡田道一氏結婚祝賀會
於北川浅二郎氏宅

於山川氏邸

三月例會兼題『春風』	〃 一五年三月一八日	〃	〃
四月例會兼題『芽』	〃 一五年四月二二日	第一一面	〃
五月例會兼題『木』	〃 一五年五月三一日	第一一面	〃
第百回例會兼題『百』	〃 一五年六月二八日	第一一面	〃
夏の歌・七月例會兼題	〃 一五年七月一三日	第七面	〃
九月例會即題『果』『物』	〃 一五年九月二五日	〃	〃
阿部龍夫君送別會席上詠	〃 一五年一一月一五日	第三面	〃
（下）『和む心』一月例會	昭和二年一月二六日	〃	〃
『雪』二月例會即題	〃 二年二月二一日	〃	〃
即題『飛ぶ』三月例會	〃 二年三月一五日	〃	〃
席題『パラソル』五月例會	〃 二年五月二四日	〃	〃
席題『垣』十一月例會	〃 二年一一月一七日	〃	〃
			於秋元松子氏宅

ところで、しげ子の作歌活動は、その発表誌からビアトリス・潮音・春草会（よみうり婦人欄）の時期に分けられる。彼女の〈歌人〉としての資質は、上記のうち、「潮音」時代に最もよく発揮された。「潮音」の時代は、その歌風によってさらに三期（大正六年から七年末・同八年から同九年末・同十年から同十二年）に分けられる。新進歌人として繊細な写実風の作品を発表し、同人中に着実な地歩を占めていく第一期の清新さも捨て難いが、彼女の個性はやはりもっぱら恋歌がその大半を占める第二期にあるといえよう。第二期前半の恋の歓びは、芥川との出会いを境としてその作品に徐々に〈愁い〉の色を濃くする。率直な恋の歓びはやがて身動きのとれぬ自身の立場を〈愁〉う〈哀しみ〉へと変化し、さらにつれない《人》との距離を確認しながら孤独の色を深めていく。以下に掲げる歌はすべて『潮音』である。

月見草仄かに匂ふ夕まぐれおもひ堪へなむわが憂かも

「山の湯」（五巻十号、大正八年十月）

いつしかも肌につめたき風ふけば心やうやく我が物となる

「木の葉の音」（五巻十一号、大正八年十一月）

秋の日のわびしく暮れて灯ともれば人を遠しと思ひけるかも

「冬近し」（五巻十二号、大正八年十二月）

うす情おもひいづれば些かはいきどほろしき心わくかも

さびしさをあつめて咲くか野のはての露いちじるき白萩の花
つれなかる人にはあらず一輪の野菊は我に背きてさけり
「秋思」（六巻十一号、大正九年十一月）

こうした詠風の変化は、彼女の歌人としての成熟とともに、やはり背後の芥川との関係も微妙に影響していると考えずにはいられない。ひとくちにいえば、しげ子の歌は、いわば社会的に抑圧すべきほの暗い私の情念を核としながら、その噴出は結局のところ伝統的な和歌の表現の枠によって抑制され、その責めぎ合いのなかからもう一歩新しい表現の地平を獲得する、というところまでには至らなかったように思われる。そうした彼女の孤独な歩みは、やがて歌壇結社として太田水穂の『短歌立言』（大正十年四月岩波書店）に示された理念を掲げる潮音社の流れから次第に遠ざかり、むしろ個々の作歌の楽しみを優先し、ゆるやかなつながりをもとめる春草会の方へと向けられていく。そして、それは同時に秀しげ子が文壇や歌壇の表舞台からしだいに退場していくしるしでもあった。

ちなみにしげ子の作歌は晩年まで続けられたはずだが、芥川没後のしげ子の足跡についてはまだ十分な調査を行っておらず、今後の課題としたい。ただ、彼女の表舞台における活動もおおむね関東大震災前後までの時期と考えられるので、ここまでの調査をもってひとまず一区切りとしたい。

なお、本図表は日本近代文学会関西支部春季大会（一九九七年六月一四日　於神戸山手女子短期大学）における発表資料を一部改訂したもので、当日の発表に際しては多くの方々よりひとかたならぬ御教示をいただいた。

注

（1）本稿は先に発表した拙稿「（秀しげ子）のために――I――芥川龍之介との邂逅以前」（立命館大学『論究日本文学』第六十五号一九九六年一二月）の続稿である。なお、本文中の（A・B・Cなど）は、先の拙稿同様、先行研究を示す。

（2）この年の『潮音』は、一月号（五巻一号）から三月号（五巻三号）までが未見なので、この間の掲載歌その他については確認できていない。

（3）『讀賣新聞』（大8・5・7、第7面）「よみうり文藝（よみうり抄）」

（4）『讀賣新聞』（大8・5・21、第7面）「よみうり文藝（よみうり抄）」

（5）岩野泡鳴「巣鴨日記（第三）」（第十二巻『岩野泡鳴全集』）。なお、『岩野泡鳴全集』は大正十～十一年に国民図書株式会社から発行されているが、本稿では、昭和四十六年十一月に広文庫から刊行された復刻版を採用している。

（6）『新潮』（大9・6）、XYZ「文壇風聞記」

（7）当時、文展の審査員などを歴任した画家・小堀鞆音と重なる混乱へのおもんぱかりがあったかもしれない。

（8）『讀賣新聞』（大9・4・5、第7面）「文藝（よみうり抄）」

(9)『讀賣新聞』(大9・4・11、第7面)「日曜附録〔よみうり抄〕」また、同様の記事が大正九年五月の『新潮』(「文藝時報」)にもみられる。

(10)『讀賣新聞』(大9・5・28、第7面)「よみうり文藝〔よみうり抄〕」。また、同様の記事が大正九年七月『新潮』(「文藝時報」)にもみられる。

(11)三嶋章道「六月の日記」(『新潮』大9・7)

(12)「文藝時報」(『新潮』大9・7)

(13)間宮茂輔「芥川龍之介斷片」(『新日本文學會』第5巻第5号、昭25・7)また、この講演会の日時は、鷲忠雄『年表 作家読本 芥川龍之介』(平4・6 河出書房)を参照した。

(14)『日本女性録』(『国際連合調査事務局』昭和四十三年四月刊行)

(15)大正十年二月号『潮音』(7巻2号)の目次では「籠居」となっている。

(16)ただし、筆者が参照したのは、同年六月刊の再版である。

(17)『讀賣新聞』(大10・8・14、第7面)〔日曜附録〕

(18)『讀賣新聞』(大11・1・5、第7面)「よみうり文藝〔よみうり抄〕」

(19)『讀売新聞』(大11・2・27、第4面「よみうり婦人欄〔春草會記念會(初回以来第五十回)〕」

(20)『讀賣新聞』(大11・5・14、第11面)「文藝〔よみうり抄〕」

(21)『讀賣新聞』(大11・10・7、第7面)「よみうり文藝〔よみうり抄〕」

(22)『日本女性録』(前掲注14)

(23)『讀賣新聞』(大12・3・13、第11面)「よみうり文藝〔よみうり抄〕」

(24)『讀賣新聞』(大12・4・24、第7面)「よみうり文藝〔よみうり抄〕」

(25)『日本女性録』(前掲注14)に、秀しげ子の現住所が番地まで記されているためそれに準ずる。

(26)江口渙「その頃の芥川龍之介」(『わが文學半生記』昭28・7、青木文庫)。

(27)江口渙「作者の言葉」(前掲注26)

(28)『讀売新聞』(大12・6・12、第4面)「よみうり婦人欄」〔春草會詠草(小野つる子氏送別歌)於山水楼〕。会の告知は『讀賣新聞』(大12・6・5、第7面)「よみうり文藝〔よみうり抄〕」に詳しい。

(29)『讀賣新聞』(大12・8・16、第7面)「よみうり文藝〔よみうり抄〕」

(30)『讀賣新聞』(大12・10・27、第4面)「よみうり婦人欄〔よみうり抄〕」に「春草會いのち拾ひの會」《畑耕一竹久夢二の兩氏が幹事となり二十八日正午から本郷三丁目燕樂軒に開催》とある。

(31)『日本女性録』(前掲注14)では、秀しげ子を株式会社電工社専務取締役夫人と伝えている。

(32)ただし、名前が柳しげ子となっているが、春草会でしげ子という名前の会員は見当たらない、また秀と柳と一文字の表記も含め

てこれは誤植であろうとおもわれる。

(33)『讀賣新聞』(大13・8・17、第6面)「よみうり日曜附録」
〔本文〕　秀しげ子「日光にて」昨日は中禪寺まで上りましたといふと大變な元気さうですが、皆な自動車と車と乗物の厄介になるのですからあんまりえばれた話では御座いません、これから信州へ行って暫くあそんでまゐります。(十三日)

(34)『日本女性録』(前掲注14)

(35)『讀賣新聞』(大14・7・3、第7面)「よみうり婦人欄〔春草會詠草〕」。
また、『讀賣新聞』(大14・6・26、第4面)「よみうり文藝〔よみうり抄〕」に、春草會例會の告知がなされている。
〔本文〕二十八日正午鎌倉北川浅二郎氏方で開催、久米、吉井、里見氏等が出る。

(36)　この時期の茅野雅子らの消息として以下の数点が挙げられる。『讀賣新聞』(大14・11・11、第4面)の「よみうり文藝〔よみうり抄〕」、『讀賣新聞』(大14・11・12、第4面)の「よみうり文藝〔よみうり抄〕」、『讀賣新聞』(大14・11・21、第4面)の「よみうり文藝〔よみうり抄〕」などがある。春草会が催した歓迎会は以下の記事による。『讀賣新聞』(大14・11・26、第3面)〔茅野雅子夫人を迎えて〕とあり写真も掲載されている。

(37)『讀賣新聞』(大14・12・10、第4面)「よみうり文藝」

(38)『讀賣新聞』(大15・5・11、第4面)「よみうり文藝」

(39)　この仏蘭西料理店エムプレスの広告記事が、『帝劇』大正十二年五月号や大正十五年二月～七月号にみられる。

(40)『讀賣新聞』大15・6・27(第7面)「よみうり子供のページ」欄

(41)　芥川文『追想　芥川龍之介』(昭56・7　中公文庫)

(42)『讀賣新聞』(大15・11・2、第4面)「よみうり文藝〔よみうり抄〕」。

(43)　青木生子「後半生」(『茅野雅子』昭45・6、明治書院)。また青木生子氏の御教示により、『雑草』の一部を複写する文献を参照した。

(44)「編輯後記」(『雑草』前掲注43)

(45)　宇野浩二「芥川龍之介」(初出は、文芸春秋社から昭二十八年五月に刊行されているが、本稿では、昭和四十二年八月刊行の筑摩書房版から採用している。)

(46)　芥川文『追想　芥川龍之介』(前掲注41)

(47)　長田幹雄「序文」(春草会『五十年集』　金剛出版)なお、この資料も青木生子氏の御教示による。

(48)　江口栄子「解説～晩年の芥川龍之介未発表ノート」(江口渙『晩年の芥川龍之介』昭63・7　落合書店)

(49)　岡田道一「あとがき」(春草会『五十年集』　金剛出版)

(なかた・むつみ　本学大学院博士課程)